

## 物語りナラティブにおける「時」の位置づけ

大野 仁美

キーワード: ナラティブ、時制、物語り

### 要旨

単独で時を位置づけできる3つの要素、時制・時の副詞・時制の小詞が、絵本を利用して収集した物語りナラティブにおいてどのように出現するかを観察した。時制の使用が節ごとに必須である言語（英・露）に対し、必須でない言語（グイ語・中国語）においてはこれらの出現は省力的である。一方で日本語においては、時制を担うとされる主動詞（およびそれに接続する形態）の末尾の形（＝「ル形」か「タ形」か）の転換の頻度が高く、両者の対立が時制の位置づけに関与する度合いは低い。

### 1. はじめに

本稿は、「物語タスクを用いたナラティブデータの収集と分析」プロジェクトの初期報告である。収集したナラティブを用いて、「時」を encode する方策が異なる言語が文をこえたレベルでどのようにふるまうか観察・分析する。このプロジェクトは主に以下の3つの個別の研究と、その統合とから成り立っている：

- (1) 非常に分析的な時制・アスペクト（・ムード）体系をもつグイ語におけるそれぞれの要素のふるまいと談話におけるそれらの制御
- (2) 融合的な時制・アスペクト（・ムード）体系をもつとされる日本語（関東および関西方言）の談話における「時」の制御
- (3) 無時制とされる中国語を母語とする話者が日本語の使用においてとる方略

以下、この節では問題の所在と対象言語および資料として物語りナラティブを選んだ理由をのべる。次節では、談話レベルで用いられるさまざまな方策を分析する前段階として、まず時制などのもっぱら時の位置づけに関与する要素がどのようにそれぞれの言語において出現するかをみる。この研究の中心は、文法化された時制がない、あるいはそれを必須としない言語であるが、分析結果を照らし合わせるために英語とロシア語も扱う。

### 1.1 問題提起：「時」の位置づけ

本稿で「時の位置づけ」とは、ある文でのべられているできごとや状態が時間軸上のどの位置でのものか、つまり発話時点やある基準となる時点からみて、同時なのか、それより「前」なのか「後」なのか、を決めることをいう。発話時点を「今」とすると、「時」の流れは、「今」より前＝過去；「今」より後＝未来、と3分割される。発話時点でないどこかべつの時点に視点を移動させた場合も、視点をそこにおけば、その時点より「前」、その時点より「後」と時の流れは分割される。あるできごとや状態が、「時」の流れのどこで起こった／起こるのかを明確にするには、“かつて”・“さっき”・“将来”等の時を表す副詞を用いれば良い。このような「時」を表す副詞は、すべての言語に存在する、時の位置づけに直接関与する要素である。

時制は、この「時の位置づけ」の手段が文法化されたものである (Comrie 1985)。通言語的に主な文法カテゴリーの一つではあるが、時制をもたないとされる言語も多く存在する。もっとも頻繁に見られる時制上の区別は過去と非過去のそれであるが、WALSでは「過去」を文法的にマークする手段のない言語は、調査対象となった222言語のうち88と報告されている (Dahl & Velupillai 2005)。ある言語に時制が存在するならば、それは定義上時の位置づけに関与するが、同時に同じ形態が時制以外の意味や役割を果たすこともある。なので、それらを区別するために、時制がもつ「時の位置づけ」に関与する意味機能のみを特に「時制性」とよぶことにする。

日本人にとってもっともなじみのあるのは英語を代表とするヨーロッパの諸言語の時制体系であろう。これらの言語では、動詞の屈折に時制を組み込むので、すべての文が時制をマークすることが必須になる。時を表す副詞は、時制が示すそれより詳細な時の位置づけを担うが、そのような副詞が文中にあっても動詞の屈折は必須で、両方で冗長に時を確定することになる。このように文ごとにローカルに時の位置づけを義務的に行う言語群をSmith (2010)にならって *fully tensed languages* とする。Smith (2010)はまた、他方に時の位置づけをもっぱら担う要素の出現が必須でない言語群を二分し、時制を持たないとされる言語群 *tenseless languages* と、またこれら両者の中間的存在として、「時」の位置づけを担う文法的要素を有するが出現が必須ではない言語群 *mixed-temporal languages* をたて、全体を三分類とした。これを、そこに挙げられている具体例とともに表1に示す (筆者が追加した情報は斜体で示す)。

表 1 時の位置づけ方法に基づく言語の三分類 (Smith 2010 による)

タイプ	具体例
Fully tensed languages	印欧語 (eg. 英・仏・独・ヒンディー)
Mixed temporal languages	アサバスカ諸語 (eg. ナヴァホ)、 <i>グイ語</i>
Tenseless languages	中国語・タイ語・マヤ語

後者2タイプの言語には、「時」の位置づけをもっぱら担う要素が全く出現しない文が存在するという点で共通点がある。中国語は歴史的にヨーロッパの言語より日本人にとってなじみのある言語であるが、おそらく、文法化された時制をもたない言語としてもっともよく知られたものである<sup>i</sup> (Chao 1948; Li & Thompson 1981; Binnik 1991)。中国語では、単独で時の位置づけをなすのは副詞のみである。時の副詞の出現は、いったん位置づけがなされれば、後続の文ではそれが繰り返されることはなく、時の位置づけのためだけに払われる労力は、冗長さを排さないヨーロッパの言語とは対照的に省力的である。ヨーロッパの言語と中国語の間に見られる、この対照的な労力の払い方の違いは、文法カテゴリーとしての時制の有無に基づくように見えるかもしれない。文法要素は頻繁に出現するが、副詞はそうではない、と。

しかし実際には、時制を担う文法要素があっても、その出現頻度が低い場合もある。グイ語 (コイサン諸語、コエ語族) は、下に示すように単独の時制小詞を有し、4つの過去、3つの未来を区別してマークする。現在時制をあらわす小詞はなく、現在を示したい場合は時制はマークされない (Ono 2010) :

グイ語 (コエ語族) の時制小詞

過去	<i>qɣ'o</i>	遠い過去
	<i>chuu</i>	昨日過去
	<i>/ne</i>	昨夜/さつき過去
	<i>ki</i>	今日過去
(現在	--	マークなし)
未来	<i>hẽe</i>	今日未来
	<i>?usi</i>	明日未来
	<i>qɣ'awa</i>	遠い未来

また、先行する文でいったん時の位置づけがなされれば、後続の文では、変化がない限り小詞の使用は必須ではない (つまり「時制の小詞」のない文がすべて「現在時制」と解釈されるわけではない)。このように、グイ語における時制の小詞の出現は、省力的である。

Smith (2010)の定義する *mixed-temporal languages* は、「屈折・活用するしないに関わらず、小詞やクリティックも含めて、直接「時」を位置づけることに関与する形態素を有しているが、それらの使用が統語上必須ではないもの」なので、グイ語はちょうどこのタイプに分類されることになる (表1参照)。

このように、*fully tensed* でない言語には、「時」の位置づけをもっぱら担う要素を含まない文が存在する。Smith (2010)は、時を位置づけるという機能において、時制は唯一の手段でもなければ、必須の手段でもないと主張し、アスペクト・動詞の項構造および語用論的情報などを統合して、いかに総合的に時の位置づけがなされるかを呈示して

いる。同様に Klein (2009)は、言語において時を encode する道具立てとして、時制 tense・時の副詞 temporal adverbial・時の小詞 temporal particle という単独で直接時の位置づけを担いうる要素3つと、アスペクト aspect・アクチオンザート Aktionsart・談話上の原則 discourse principle という、他の情報と総合的に働いて時の位置づけを担うとされる要素3つをあげている。そして、時の位置づけの研究が少数の印欧語(=すなわち fully tensed languages である)を対象としたものに偏って展開されてきたことを指摘している (Klein 2009: 41-42)。

また実際には、fully tensed の言語においてはむしろ表現しづらい概念も存在する。たとえば、少なくとも人間の認識の範囲において存在する普遍的真理や恒常的運動(たとえば「太陽は東から昇る」など)は定義上どこかの「時」に位置づけされるものではない。そうであっても、fully tensed languages である英語では、この概念は無時制では実現されず「現在時制」でもってあらわされる。したがって、fully tensed の方がそうでないものに比べて、より過不足なく「時」の概念に形式を与えているというわけではない。

グイ語にはまた、アスペクト(およびムードも)が時制とは別個の独立した小詞として存在する。時制の小詞とアスペクトの小詞は、一つの節内にそれぞれ単独で出現することも、組み合わせあって出現することも可能である(中川 1994; Ono 2006)。したがってこの言語は、時のコード化に関して通言語的に非常に分析的 analytic なタイプであるといえるだろう。それらすべての要素がどのように用いられるかを観察し分析することは、時制とアスペクトが融合的に実現する言語の体系の再分析に新しい視点を提供する可能性がある。そこで、グイ語に関しては、より多様な事例が収集できるようナラティブデータもさらに拡大する予定である。

時制とアスペクトが融合的である言語と言えば、日本語がそうであるとされる。日本語はそもそも文法化している時制を有しているのか、有しているならばそれは単独の形態素であらわされるのか、それともアスペクト(やムード)と融合しているのか、などの点において controversial である(cf. 金水 2000)。ここではその議論に立ち入ることはしないが、それらの中で、おそらく現在もっとも広く用いられている理論的枠組みの1つとして、工藤(1995: 8)による日本語の「時制・アスペクト体系」のパラダイムを表2にあげておく。これに従えば、日本語においては時制とアスペクトが融合しており、形態上分離できないということになる。

表 2 日本語の時制・アスペクト体系 (工藤 1995 による)

アスペクト→	完成相	継続相
時制↓		
非過去	スル	シテイル
過去	シタ	シテイタ



非過去を「ル形」；過去を「タ形」と称することが多いが、この体系においては、「スル」は“完成相・非過去”；「シタ」は“完成相・過去”であり、ともに同時に「完成相」というアスペクトを担っている。主文の動詞はその形態上必ず時制を有していることになり、この体系をもって日本語を上記の Smith (2010)の三分類にあてはめるならば、*fully tensed language* ということになる。

しかし、形態上の「時制」と、その意味機能としての「時制性」を分けて考えれば、日本語の形態としての時制は、時制性が低いといえる。この体系においては「スル」と「シタ」の対立は、定義上時制上の対立でなければならない。実際には、書かれたテキストやナラティブにおいて、「ル形」と「タ形」の転換が頻繁におこることが知られている。Szatrowski (1984)は、録音された会話中の「ル形」を「タ形」に、「タ形」を「ル形」におきかえて被験者がそれを過去・非過去のどちらと判断するかを調査し、置き換える前と置き換えた後とで判断に変化がみられないケースがあることを報告している（同時に置き換え不可である場合も存在するが）。同様のことは、後述するように物語りナラティブについても指摘できる。工藤 (1995)自身も書かれたテキストに用いられた日本語を分析し、そのすべての部分で過去形と非過去形の交替現象が起こることを指摘している。そしてそれは、

現実の発話行為の場へのアクチュアルな指向性がなくなるがゆえに、テンス形式が、ダイクシスとしての機能を失ってしまう (工藤 1995: 210)

からである、と説明している。「スル」と「シタ」の場合、両者ともに「完成相」なので、時制性が押さえられて発動しないのであれば、定義上対立はなくなるはずである。時制上の対立がなくなる／なくなるのはどのような条件によるものか、物語りナラティブを用いて探究したい。また、そもそも日本語の時制転換は *fully tensed languages* である英語やロシア語においてみられる *historical present/narrative present* と現れ方も性質も異なるのではないかという見通しをもっている。

## 1.2 資料

### 1.2.1 物語りナラティブ

前節で提起した問題を研究するための談話資料として、この研究では「物語りナラティブ(*picture book rendition* あるいは *picture book narration*)」を利用する。ここで「物語りナラティブ」というのは、書かれたものではなく、話者が口頭で語ったものを採取したものを呼ぶ。内容は、過去のできごとや体験を話者が思い出して語ったり、目の前のできごとを描写するものではなく、絵本を見てそれが描いている「物語り」をその場で即興で作成してもらったものである。

ナラティブ採取のために利用した絵本は *Frog, Where Are You?* (Mayer, 1969)である。これは、24 ページの絵からなる文字情報のない絵本で、少年が犬と一緒に、いなくなった蛙をさがしに行き道中さまざまなことを経験するという話が描かれている。こど

もにとってもわかりやすいストーリーが展開されている<sup>ii</sup>ので、こどものナラティブデータを採取するのにしばしば使用されている(Minami 2011 など)。室内の描写が多いと文化的個別性が強くなってしまいが、この絵本は野外でのシーンが多く、またさまざまな動作(覗き込む・逃げ出す・探す・窓から落ちる・抱きかかえるなど)が描かれていることから、**elicitation** では採取困難な動作表現が得られることを期待して、未記述の言語の文法調査のためのデータ収集にも利用されている。

### 1.2.2 物語りナラティブを利用する利点

時の表現を観察するのに物語りナラティブを利用する理由は、まず、絵本を利用すると、始まりと終わりが明確で、1 ページごとに時が経過して行くナラティブを採取できるということである。物語りナラティブは、時がどのように表現されるかを観察するのに格好の資料を提供してくれる。

次に、書かれたナラティブは、口頭のものに比べ、書き手が技巧上の工夫のために視点の転換を利用することが多い。例えば小説などの場合、より複雑で楽しめる作品にするために入り組んだ時の設定がされることもある。これらをできるだけ考察の対象外とするためには、口頭ナラティブの方が資料として扱いやすい。また、口頭のものであっても、経験を語る場合は、当然過去のできごとを描出することになるが、同時にしばしば発話時点における話者の評価や解釈を述べる節が現れ、それは過去の出来事を語るのとは異なる時制を伴って描出される。なので、これらを区別・分類する手間がより多くなる。それに対して物語りナラティブを利用した場合は、話者の評価を比較的さしはさまない、時の流れが一方向に流れる一貫したひとかたまりのストーリーを得ることができる。

つまり、書かれたナラティブや、同じ口頭ナラティブでも経験を語ったものと比べて、物語りナラティブには視点の移動が少ないので、時制の転換を観察するにあたっては、視点の移動によって生じたのではないものを観察できる可能性が高い。

本稿では、物語りナラティブにおける「時の表現」の現れ方とその確定のされ方を、物語りの最初の部分を例示することによって、日・英・露・中・グイ語の5言語において概観する。これら5言語は、次節で略述するように、どのような時制体系を有しているか(あるいはないか)という点においてそれぞれ異なっている。物語りをはじめ最初の一文は、ここで時を **anchor** されると言われる場所であり、時の表現がみられる可能性が最も高い。なので、最初から、蛙がいなくなるまで述べた部分をサンプルとしてみていくことにする。

### 1.2.3 資料の採取

資料は、以下の手順で収集した。録音には、オリンパス LS-11 を利用した。

話者に絵本(コピーしたもの:ストーリーに関して予断を与えないよう、表題部分は

消去)をみせ、そこに描かれている絵をみて物語をつくってもらうよう依頼する。まず、話者が物語を組み立てられるよう、絵本を最初から最後まで全体を通して2回みてもらおう。話者は準備ができるまで充分時間をとる。準備ができたと話者が判断した時点で、録音を開始する。なお物語の語り方について、どのようにするべきなのか質問を受けた場合、こちらからはこうするほうがよいという指示はしない。話者がこれでよいと思うやり方で、やりたいように自由に語ってくれるように依頼する。話者が録音者の同席を望まない場合は、話者単独で録音を実施した。語り方は話者にまかせたが、録音した資料はおおむね5分から7分の長さであった。

グイ語データをのぞき、録音されたデータを文字に起こしたのは、その言語を母語とする者である。英と露は被録音者本人が、グイ語は筆者がグイ語話者と協力して起こした。日・中は本人が起こした場合も本人以外が起こした場合もある。

## 2. 時を表す表現と時の位置づけ

この節では、定義上単独で「時」を位置づけることができる3つの要素、時制 **tense**・時を表す副詞 **adverb**・時制をあらわす小詞 **tense particle** がテキスト上でどのように出現するか、またどのように位置づけに関与するかを観察する。

時制は、過去と非過去を区別するものが最も多く、またその場合マークされるのは通常「過去」なので、例文中「過去」を示す要素を方策（動詞の屈折か、単独の形態素か、時を表す副詞か、等）にかかわらず、で囲って示す。そして、それらによってその文の時の位置づけの解釈が決定されるか否かを確認する。まず英・露・中・グイの4言語の例を観察し、これらの要素の存在が時の位置づけに決定的に関与しているのを確認する。

本稿における考察（2013年2月現在）を実施するにあたって利用したデータサンプル数と話者情報を表3に示す。

表3 英・露・グイ・中のデータ数と話者情報

言語	サンプル数と話者の情報
英語	サンプル数：1（20歳代・カナダ人男性）
ロシア語	サンプル数：1（20歳代・ロシア人男性）
グイ語	サンプル数：2（40歳代1；50歳代1・ボツワナ人男性）、 うち40歳代話者の1例を利用（もう1例はストーリーを形成せず）
中国語	サンプル数：7（20歳代6；30歳代1・中国人女性）、 うち20歳代1例（翻訳が未完了）を除く6例を利用

### 2.1 時制を動詞の屈折で表す言語：英語とロシア語

まず時制を持つ言語の例として、時制が動詞の屈折でコードされる英語とロシア語の

例を見ておく。英語やロシア語では必須要素である動詞の過去形（の繰り返し）と、過去を表す副詞の出現によって、このストーリーが過去のできごととして語られていることが分かる。

なお、以下日本語以外の例には日本語で対訳をつけるが、自然な日本語らしい訳ではなく、できるだけ元の言語で表現されている内容に忠実であることをめざしたものをつける。原文で□でマークされている部分に該当する対訳の箇所（一部の場合もより広い範囲をマークする場合もある）は同様に□でマークするが、必ずしも「過去」を表す表現を用いているわけではない。なおここではこれらの要素の出現を確認するのが目的なので、逐語訳や文法情報は省略する。

例(1): 英語 (E-AG-2~5<sup>iii</sup>)

There once lived a boy named Billy, living with his dog Puppy and his frog Froggy. Billy loved Froggy so much, everyday before going to sleep he'd always... talk to him and read him stories... One day, when Billy was sleeping, Froggy... slipped out of his bowl and...ran away. When he woke up, when Billy woke up...he found that Froggy was gone...He wondered, "why is, why is Froggy gone?"

昔、ビリーという少年が□いて、犬のパピーと蛙のフロッギーと住んでいた。ビリーはフロッギーが□大好きで、毎日寝る前に話しかけ物語を読んであげた□。ある日、ビリーが□眠っている間に、フロッギーはボウルから□出ていった□。□起きた□とき、ビリーは□起きた□ときにフロッギーが□いなくなってしまった□ことを□知った□。かれは、「なんで、なんでフロッギーはいなくなったの?」と□思った□。

例(1)は、まず最初の文に *once* ‘かつて’ という過去を表す副詞が用いられていることから、過去のできごととして語られていることが分かる。同時に、すべての文において、（従属節中の動詞も含め）述語動詞は過去時制にマークされる。例外は、このナラティブ例においては引用と解釈される部分のみである（例1の末尾参照）。主文の述語動詞が過去でないのは、このナラティブ全体で39文のうち、全体がセリフでできている1文のみで、そこでは現在形が用いられている。

次に、ロシア語の例を見る。英語と同様、それが過去の話であるならば、すべての文の主動詞が過去に *anchor* される。以下に示す例(2)では、過去を表す副詞は用いられていない。

例(2): ロシア語 (R-VA-1~4)

У мальчика дома жила собака. Однажды они вместе поймали лягушку, и посадили её в банку. И однажды ночью, пока мальчик и его собака спали, лягушка сбежала

из банки. Когда утром они проснулись, то обнаружили, что в банке ничего нет.

(ある) 少年のところに犬がいた。ある日、彼らは一緒に蛙を捕まえて、それを瓶に入れた。そしてある夜、少年と犬が寝ていたとき、蛙は瓶から逃げた。朝起きた時、彼らは瓶になにもないことに気づいた

下線をひいた部分 (=補文内) に過去を表す要素が来ないことがロシア語と英語との相違点である。従属節内の述語動詞はこのように相対時制をとり、時制の位置づけに直接は関与しない。なので、ここで「過去」の位置づけを観察するにあたっては、従属節中の要素は出現をマークするのみとし、カウントするのは主文の動詞に限っている。例(2)は全体 31 文の主文の動詞すべてが過去形をとっていた。

## 2.2 時制を表す小詞を有する言語：グイ語

グイ語(G/ui)は、コイサン諸語、コエ語族(Khoe)に属し、アフリカ南部ボツワナ国で話されている。グイ語には書記言語はないので、口頭でのものを起こした資料以外に最初から書かれた形態でのナラティブは存在しない。先述したように、この言語では、時制・アスペクト(・ムード)はそれぞれ別の小詞で分析的に表される。これらは文の必須要素ではなく、これらが無い文も、時制やアスペクトの小詞がいずれか1つある文も、両者が1つずつあって組み合わせられて用いられている文も存在する。ただし、同一節内に2つ以上の時制小詞や2つ以上のアスペクト小詞は共起しない。このように、時制とアスペクトはまぎれることなく分析的にコードされる (Ono 2006)。

以下の例では、一番最初の文において「遠い過去」を表す小詞 *qχ'o* が用いられている。しかし後続する文には時制の小詞はまったく用いられていない。

例(3): グイ語 (G-KG-1~3)

khue bi qχ'o haã ja ?aba ma !?onana-ha, !'oã-ha, ja g!ue bi ja, !gue ma sie ja aaku, ?ama  
χalase si ?owa ≠ã. ?etsera !χae si ka ≠noe-na, ?aba bi ja χalase si ?owa ≠ã ja g!ue ma  
≠?an qχ'oo ca ≠?an. g!ue bi ja χalase si ?owa ||nai ja ≠qχ'oa, ja ||nai ja ≠qχ'oa ja !õo,  
?etsera ||?oam ja kua ≠χai ja ?ama !aa ja ?ama kene ja cua ?ama moo.

男がいて、犬を飼っていた、で蛙は、で蛙を手に入れて、それを瓶の中に入れた。夜、彼らは腰を下ろしていて、で犬はガラスの中に(口を)入れて、蛙をほしいと、食べたいと思っていた。蛙はガラスから飛び出て、飛び出て、行ってしまった、彼ら(男と犬)は寝て、起きたら蛙がいないことに気づき、探したが見つけれなかった。

このナラティブ（全30文）の中で、過去の小詞はこの1カ所にしか現れない。いったんテキスト上の時をある時点に anchor したら、転換の必要がなければずっとその「時」が継続していく。なので、実際話者が「過去」と認識しているのか、「中立」あるいは「時制無し」と認識しているのかはわからないが、後続する文は、「時」は表されていなくても解釈上はずっと過去のできごととして語られていることになる。これはちょうど、このひとかたまりのストーリーの最初の1カ所が過去にピン留めされているようなイメージである。これは、時制をもたない中国語の時の表し方と、ピン留めに用いる道具は違うが、似ていることを次に見る。

### 2.3 時制をもたない言語：中国語

録音した7例のうち、翻訳作業まで終了している6例をみると、過去の副詞が用いられているのが3例、いないのが3例であった。まず、以下で最初の文に過去を表す副詞が有る例をあげる。日本語の対訳は、このデータの語り手ではない中国語話者が元の中国語の意味をなるべく生かすようにしてそれに近い日本語を作成したものである。

#### 例(4)中国語 (C-TY-1~3)

…啊从前有个小朋友，他养着一条狗，有一天，一只青蛙，啊他们抓了一只青蛙，在一个瓶子里。然后呢，晚上的时候，啊这个小朋友和小狗在睡觉的时候，青蛙，就逃走了。第二天早上…这个，小朋友和小狗看见青蛙没有了，所以就觉得，很难过。

昔ある子どもがいて、彼は一匹の犬を飼っていて、ある日、一匹の蛙、彼らは一匹の蛙を捕まえて、(一つの)瓶にいった。そして、夜、子どもと子犬が寝ている間に、蛙は逃げた。翌日の朝、子どもと子犬は蛙がいなくなったのを見て、それで、とても悲しいと思っている。

この中国語の例は、時を単独で位置づける要素の分布という点では先に見たグイ語の例と似ている。つまり、最初の文にのみ過去をあらわす要素（グイ語は時制をあらわす小詞でもって；一方中国語は時を表す副詞によって）があらわれ、それ以降の文には、時を表す要素は現れない。

次に、時を anchor することばが入っていない例をあげる。

#### 例(5) 中国語 (C-YQ-1~4)

小男孩儿的父母都工作，所以他一个人很寂寞。他养了一只狗和一只青蛙。有一天晚上小男孩儿睡着了的时候，那只青蛙悄悄地逃跑了。早上醒来，小男孩儿发现罐

子里的青蛙不见了。

少年の両親は共働きなので、彼はいつも寂しがっている。彼はペットの犬と蛙を飼っている。ある日の夜、少年が眠りについた後、蛙はこっそりと逃げていった。朝目が覚めて、少年は瓶の中の蛙がいなくなったことに気づいた。

これは、過去の話なのだろうか、それとも今日の前で起こっているできごととして語られているのだろうか。下線部「有一天晚上」は未来の文脈でももちいることができるが、物語によく用いられるので、話者自身は過去を示す表現と理解して用いた；また語り方としては、過去の話なのだけれど、目の前でおこっているように語ったということである。なお「次の日」「その晩」などは、ある基準時点との関係をしめす副詞で、単独では時を位置づけできない。なのでこの例には単独で「過去」に位置づけできる要素は存在しない。

なお日本語訳は、日本語らしさは目指しておらず、元の中国語文の内容をできるだけそのまま示せるように作成を中国語話者に依頼したものである。ここでは元の「了」によって「タ形」が用いられていることだけ指摘しておく（于琦 2012）。

ここまで見てきたそれぞれのデータにおいて、一つの文中に過去を単独でしめす要素があるかどうかを表4にまとめる。ただし、ナラティブにおける「文」の認定は容易ではない；文法性および前後のポーズを判断の根拠としているが、現時点では暫定的なものである。

表4 「過去」の要素の出現（英・露・グイ・中）

	サンプル数	全体の文の数	「過去」の要素を含む文の数	「過去」の要素を含まない文の数
英語	1	39	38	1(全体がセリフである文)
ロシア語	1	31	31	0
グイ語	1	30	1	29
中国語：過去の副詞有り	3	75	3	72
中国語：過去の副詞無し	3	51	0	41

## 2.4 日本語

この節では日本語の資料をみる。日本語の物語りナラティブの特徴は、それぞれ「過去」と「非過去」を表すとされる「タ形」と「ル形」が混在するということである。つまり、前節で扱った4言語と異なり、日本語は時制の転換が多いことを確認する。

まずデータの概要を述べておくと、2013年2月の時点で録音・トランスクリプション・校正の段階が終了しているのは、14名分（全員女性）、うちいわゆる標準語とされる関東（千葉・茨城・栃木）の変種（全員麗澤大学生）が6名、和歌山県方言が8名（高校生6名と40歳代の女性2名）である。すべてを「テ」形でつなぐ例が3例（すべて和歌山県高校生）あったのでそれを除外した11人分のナラティブデータにおける文末の「タ形」と「ル形」の現れ方を表5に示す。全体が登場人物のセリフでできているものと、「テ」形で終了していて時制を確定できないものをのぞいて、「タ形」と「ル形」が用いられている文の数をそれぞれ示した。また、それらを足した全体のなかでル形がしめる割合をパーセント（小数点以下四捨五入）で示し、その低いもの（つまり「タ形」の割合の多いもの）から高いものの順に並べた。

表5 日本語のナラティブにおけるタ形とル形の出現数

話者	物語りの導入	文の数	文末のタ形	文末のル形	ル形の割合	セリフだけの文	その他（テ形など）
MN	タ形	18	17	1	6%		
NM	タ形	17	15	2	12%		
HS	タ形	21	18	3	14%		
YS	タ形	26	19	4	17%	2	1
YK	タ形	42	25	9	26%	6	2
OH	タ形	17	12	5	29%		
TS	ル形	20	11	8	42%		1
IM	タ形	77	18	14	43%	42	3
SA	タ形	40	17	22	56%		1
HM	ル形	44	13	30	70%		1
KK	タ形	22	3	19	86%		
			計 168	計 117			

具体例をみてみよう。まずは、もっとも「タ形」の割合の高い例をみる。

例(6): 日本語 (J(W)-MN-1~3)

ある男の子と犬が、夜に飼っているカエルを見ていました<sup>iv</sup>。そして男の子と犬が眠りにつきたころ、そのカエルは部屋を抜け出しました。朝になって、男の子と犬が起きてみると、育てていたカエルがいなくなっていました。



次の例(7)も同様に、この話を「タ形」で導入しているが、途中で「ル形」が出現する。

例(7): 日本語 (J-SA-1~4)

ある夜の日、男の子は、今日捕まえた、カエルを瓶の中に入れ、眺めていました。明日の朝になったら、このカエルを友達に、自慢してやろう、と思っていました。ペットの犬も、カエ、瓶の中の、カエルに興味津々です。しかし、朝男の子が起きてみると、瓶の中に入れておいたはずの、カエルがいません。

例(7)の後半部分は、そこだけ単独で呈示されたら、だれもが「現在」の状況を描出している文であると判断するであろう。しかし、この位置にある場合、状況や背景を説明する文で時が位置づけられており、それがそのまま継続しているので、わざわざ再呈示することをしていないように思えないだろうか。

いずれにせよ、日本語の文末の形は、必ず「タ形」か「ル形」かをとらなければならないが、それが必ずしも時の位置づけに関与しているわけではない。このような現象は、英語やロシア語にみられる *historical present / narrative present* と同様に、*non-canonical* な用いられ方 (Klein 2009)だと考えるべきだろうか。それとも、日本語の時制・アスペクト体系においては、むしろ本質的な、あるいはそれに近い用いられ方だと考えるべきだろうか。

一方、次の例(8)は、「ル形」で導入されたが、途中で「タ形」が出現する例である。「物語り」は、過去のできごととして語ることも、目の前で今まさに起こっていることとして語ることも可能である。また絵本の絵の一枚一枚について、それが何を描いているのかを述べていくという語りかたも可能である。したがって、話全体の *deictic* な時の設定として、過去を選ぶか現在を選ぶかは、両方可能なのであるから、問題にはならない (あるいは、*fully tensed* でない言語においては「無時制」という選択も可能なのかもしれない)。問題は、どちらを選んでも、日本語の場合「タ形」と「ル形」の両方が混在するということである。

例(8): 日本語 (J-KK-1~3)

えーと、小さな男の子は、自分の部屋の中で、犬とカエルを飼っています。カエルは、窓が少し開いているのを確認して、外へ逃げて行こうとします。朝、男の子が起きると、カエルが部屋の中にはいませんでした。

この「タ形」である「いませんでした」は、この文を過去に位置づけているのだろう

か。仮に、日本語においては時制とアスペクトが融合していて、あるときに時制性が、あるときにはアスペクト性が優位に顕在化するのだとしたら、それはなにによって引き起こされていると考えるべきだろうか。この問題について、次の段階ではアスペクトや談話構造も考慮にいれ引き続き考察を進めていきたい。

### 3. まとめ：今後の展開にむけて

本稿では、物語りナラティブにおいて単独で「時」を位置づけることができる要素の出現を見てきた。英・露・グイ・中においてはそれらの存在は時の位置づけにおいて決定的な役割を果たしているのに対し、日本語では時制の対立とされるものの「時制性」は低いことを確認した。今後は、本稿であげたいくつかの課題について、総合的な方略での「時」の位置づけがどのようになされているのか分析を進める。

### 謝辞

本稿で扱ったグイ語データの収集は、科研費（研究代表者：大野仁美；課題番号70245273）を、日・中・英・露語資料の収集（およびトランスクリプション）は、麗澤大学特別研究助成（平成23年度・24年度）をうけてそれぞれ実施したものである。記して感謝申し上げます。また南紀方言の録音の際には、和歌山県立串本古座高校串本校舎を使用させていただいた。便宜を図ってくださった同校教頭永石和先生、山本佐代美さま、八代かおり先生に深謝申し上げます。また、調査にご協力下さった皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

### 参考文献

- 金水敏 (2000) 「時の表現」、金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2 時・否定と取り立て』:3-92、岩波書店
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 中川裕 (1994) 「グイ語調査初期報告」『アジア・アフリカ文法研究』22: 55-92. アジア・アフリカ言語文化研究所
- 于琦 (2012) 「物語タスクを用いたナラティブテキストにおける中国人日本語学習者の時制の使用」麗澤大学大学院言語教育研究科日本語教育学専攻修士論文構想発表会発表資料 (2012/7/12)
- Binnik, R. I. (1991) *Time and the Verb: A Guide to Tense and Aspect*. Oxford University Press.
- Chao, Y.-R. (1948) *Mandarin Primer: An Intensive Course in Spoken Chinese*. Harvard University Press.
- Comrie, B. (1985) *Tense*. Cambridge University Press.
- Dahl, Ö & Velupillai, V. (2005) Tense and aspect. In: Haspelmath, M., Dryer, M. S., Gil, D.

- & Comrie, B. (eds.) *The World Atlas of Language Structures*: 267-281. Oxford University Press.
- Klein, W. (2009) How time is encoded. In: Klein, W. & Li, P. (eds.) *The Expression of Time*. Mouton de Gruyter.
- Li, C.-N. & Thompson, S. A. (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. University of California Press.
- Mayer, M. (1969) *Frog, Where Are You?* New York: Dial Press.
- Minami, M. (2011) *Telling Stories in Two Languages: Multiple Approaches to Understanding English-Japanese Bilingual Children's Narratives*. IAP-Information Age Publishing.
- Ono, H. (2006) Irrealis modality in /Gui. Paper presented at the 2nd International Symposium on Khoisan Languages and Linguistics, Haus Bergkranz in Riezlern, Austria, 10 Jan 2006.
- Ono, H. (2010) Tense. In: Tanaka, J. & Sugawara, K. (eds.) *An Encyclopedia of /Gui and //Gana Culture and Society*. 京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学研究室
- Smith, C. S. (2010) Time with and without tense. In Guéron, J. & J. Lecarme (eds.), *Time and Modality*: 227-249. Springer.
- Szatrowski, P. (1984) "Pastness" and "narrative events" in Japanese conversational narratives. In: Tomlin, R. S. (ed.) *Coherence and Grounding in Discourse*: 409-433. John Benjamin.

---

注

- <sup>i</sup> 中国語の TP の存在を巡って近年議論があるが、これについては稿を改めて概観したい。
- <sup>ii</sup> ただし、話者の文化的背景によっては、かならずしも解釈は容易ではない。グイ語の 1 例はストーリーを形成しなかったため、今回の考察の対象としなかった。
- <sup>iii</sup> 元資料の情報は以下のように示す：言語名-話者名（イニシャル）-文番号。言語名の略号は、E: 英語；R: ロシア語；G: グイ語；C: 中国語；J: 日本語（関東方言）；J(W): 日本語（和歌山方言）。
- <sup>iv</sup> 「夕形」として、動詞全体を□で囲って表示する。